

# 幼児期の社会的スキルトレーニングに関する研究動向

中 尾 繁 史

(2020年3月5日受理)

## Current Trends in Research on Social Skills Training for Children

Shigenori NAKAO

要旨：保育現場では、社会性を育むために様々な実践がなされているが、ソーシャルスキルトレーニングのような系統的手法が導入されている事例は多くない。そのため、本稿では幼児を対象としてソーシャルスキルトレーニングを実施している先行研究から、保育現場で実行するための社会的スキル学習の設定について検討した。子どもが示す問題行動に直接的に介入する場合には個別のソーシャルスキルトレーニングが特に有効であること、集団を対象としたソーシャルスキルトレーニングでは友達を誘ったり話しかけたりする主張スキルが効果的に学習でき、その結果問題行動が減少するなどさまざまな効果が見込まれることが確認された。それゆえ、保育現場ではすべての子どもたちにソーシャルスキルトレーニングの手法をもとに、社会的スキルの学習場面を設定することが望ましいと考える。

Key words：幼児 社会性 ソーシャルスキルトレーニング

### 1. はじめに

幼稚園、保育所、こども園のような“子どもたちが集団で過ごす”場面は、家庭ではあまり経験することができない“同年齢の集団”の中でのふるまいを学ぶ重要な機会である。こうした同年齢の子どもたちが集団の中で経験する事象は、就学後の学校生活の基礎となることは明らかであろう。子どもたちが習得した集団の中でのふるまいは、保育・幼児教育場面では社会性という言葉で表現されることが多い。渡辺<sup>1)</sup>は、社会性を以下のように定義している。

- 生を受けてから社会の成員になるまでの過程で身につけていくものであり、人間関係を形成し円滑に維持する能力
- 発達心理学で考えられる社会性の具体的な中身としては、対人行動（他者に対して適切な対応ができること）、集団行動（集団の中で協調的に行動できること）、社会的欲求（仲間から好

意を受けたいという欲求を持つことや仲間として認められたいという欲求を持つこと）、社会的関心（時代の情勢、風潮に関心を寄せること）などが挙げられる

この定義をふまえると、社会性という表現を用いる場合には、対象者の発達段階に応じた観察可能な行動に言及する必要があるだろう。例えば、まだ明確に言葉を発しない時期にある子どもを指して、「ありがとう」が言えないから“社会性がない”とは評価しないし、5歳の子どもが言葉巧みに友達同士のいざこざを解決するような場面では“社会性が高い”などと評価できる。高橋らが、幼児期の社会的スキルの習得状況がその後の子どもの社会適応や学校適応に大きく影響することを指摘<sup>2)</sup>していることから、子どもたちが集団における好ましいふるまいを学ぶことの重要性に異論はないだろう。しかし、子ども自身の発達の個人差、家庭での養育状

況、集団の構成員の違いなど多くの要因から、保育者は社会性の学習場面の設定に悩む状況にあると推測できる。

ところで、社会性の学習場面を系統的に設定する手法として社会的スキル訓練（Social Skills Training, 以下SSTと略す）が知られている。この手法は対人行動や集団行動の学習と親和性が高く、学齢期以降の子どもや成人を対象として活用されてきた。特に学齢期以降の発達障害児者を対象とした研究報告は多い。しかし、幼児を対象としてSSTを実施している研究は、学齢期以降の子どもを対象とした研究と比較するとあまり見られない。そこで、本研究では、幼児を対象としてSSTを実施している研究報告から、保育現場での社会的スキルの学習場面設定について考察することを目的とした。

## 2. 個人を対象としたSSTを実施している研究報告

岡村・杉山<sup>3)</sup>は5歳5ヵ月の男児1名を対象として当該児童が示す引っ込み思案行動に焦点化したSSTを実施している。保育所での観察により、対象児の引っ込み思案な行動は、対象児が周囲の幼児に働きかけた際に嫌悪的な反応が返ってくることを繰り返し学習した結果であるとし、周囲の幼児との関わりが強化的に機能することを目指して「話を聞くスキル」と「質問スキル」の学習場面を設定した。話を聞くスキルは対象児にとっては達成が容易なスキルであったが、これは「質問スキル」の介入に備えたものであった。SSTを実施した結果、自由遊び場面でも質問するスキルが活用されており、周囲の幼児と遊びについて互いにコメントしあう場面が増加した。さらに、訓練前と比較すると集団活動からの逸脱が減少しており、スキル習得によって活動に参加できる場面が増加していた。これらの点から、対象児の引っ込み思案な行動は、SSTを実施する以前には周囲の幼児との相互作用の機会が少なかったこと、さらに少ない機会での失敗体験により維持されていた可能性があることを指摘している。この事例においては、SSTを介して仲間との強化的な相互作用が形成され、さらに対象児の好む活動で相互作用が生じたことが良い影響を及ぼしたと報告している。

半田ら<sup>4)</sup>は、自閉症スペクトラム障害のある4歳6ヵ月の女児を対象としてSSTを実施している。対象児は同年代の子どもと対人面でのトラブルが多く、特に玩具や道具を貸し借りする場面でトラブルとなっていた。対象児の行動の機能的アセスメントにより、遊びの場面で道具やおもちゃを「貸して」というスキルと他者から貸してと言われた時に「もう少し待って」というスキルのSSTが設定された。訓練後3ヵ月のフォローアップでもスキルの活用が見られ、機能的アセスメントに基づいたSSTは、対象児のソーシャルスキルの獲得と維持に有効であったことが示された。この事例では、訓練後の日常生活でも保護者が獲得したスキルの活用に対して強化を行っており、この点もソーシャルスキルの獲得と維持に寄与したと報告している。

## 3. 集団を対象としたSSTを実施している研究報告

岡村ら<sup>5)</sup>は、幼児を対象として集団SSTを実施している。対象児はひとクラス13名程度の集団であり、研究には78名の幼児が参加した。訓練前の社会的スキル評定尺度の結果から、社会的スキルの高群、中群、低群の3群に分類し、それぞれの群の訓練効果を比較している。担任保育者への聞き取りと行動観察によって、「上手に聞く」スキル、「仲間に入る」スキル、「あたたかい言葉かけ」をするスキルの3項目を設定した。SSTの実施後には、社会的スキル低群に社会的スキル評定尺度の総得点の増加が見られ、自由遊び場面での観察においてはスキル低群と中群に「協調的行動」の増加が見られた。岡村らは、訓練前に社会的スキルの程度が高くなかった群では特に訓練効果が高く、集団に対して訓練を実施することで一人ひとりの子どもがスキルを身に付けるのと同時に、周囲の子どもがスキルを使用する場面を見ることで子どもたち全体にスキルの使用が促進されるメリットがあったと報告している。その一方で、標的として設定した社会的スキルは習得したものの、問題行動が増加していた。その原因として問題行動を代替するスキルが選定されていなかったことを挙げている。個人を対象としたSSTを実施する場合、問題行動を置き換える好ましい行動

が生起されるように介入場面を設定するが、集団を対象とした場合には子どもたちの人数が多いほどそれが難しくなる。この点は集団に対してSSTを実施する際の課題となりやすいと考えられる。

高橋ら<sup>2)</sup>は、幼児の問題行動を対象とした集団社会的スキル訓練の効果を標準群との比較から検討した。介入群は5～6歳の309名が、標準群は5～6歳の971名がプログラムに参加した。SSTは「上手な話の聴き方」「優しい言葉のかけ方」「よいところをほめる」「道具の借り方」「優しい頼み方」「友だちの気持ちに気づいたときの言葉」で構成した。集団SSTの実施によって、幼児用社会的スキル尺度の主張スキル、協調スキル、自己統制スキルの向上がみられ、標準群よりも介入群の主張スキルが有意に高いことが示された。また、幼児用問題行動保育者評定尺度では、外在化問題行動得点が訓練前に標準群よりも介入群のほうが有意に高かったが、訓練後には有意差がなくなっていた。また、媒介要因を分析した結果、主張スキル、協調スキルの向上によって問題行動が減少した可能性があることを指摘している。これらの結果から幼児に対する集団SSTは、社会的スキルのなかでも主張スキルの習得に関して効果的な介入であることを報告している。

#### 4. 保育現場での社会的スキル学習の場面設定

上述の通り、個人を対象としたSSTでは、幼児が示す問題行動に直接的にアプローチすることが可能である。岡村らの事例では、引っ込み思案な行動特性を対象としているが、これはAchenbach & Edelbrockの分類<sup>6)</sup>に従えば内在的問題行動に分類される。内在的問題行動とは自罰的感情や気分が中核となる問題行動で、保育者には見過ごされやすい側面があるといえる。換言すれば、引っ込み思案といった見過ごされやすい子どもの行動もSSTで改善できる可能性があることを示している。この事例では参加しながらなかった対象児が成功体験を重ねることで活動に参加できる場面の増加が見られており、内在的問題行動に対する社会的スキルの学習場面を設定する際には成功体験の積み重ねが特に重要な視点であると考えられる。

また、半田らの事例では対人面でのトラブルという外在的問題行動に対してSSTを実施していた。外在的問題行動は他者に対して有害で破壊的な行動として特徴づけられる問題行動で、保育者には過剰に反応されやすい側面があるといえる。この事例では機能的アセスメントに基づいて介入するスキルを選定しており、外在的問題行動に対してSSTを実施する場合には機能的アセスメントの手法を保育者が理解しておくことで効率の良いスキル獲得につながると考えられる。

その一方で、集団を対象としたSSTでは、特定の幼児の問題行動に直接的にアプローチを行うのではなく、多くの子どもたちにとって有益と考えられる標的を設定することになる。高橋らの研究では標的スキルの選定理由が明記されていないものの、標的スキルの内容は岡村らと同様に集団の中での外在的問題行動に対するものであった。集団を対象としたSSTは問題行動に対して予防的に作用させることに主眼をおいていると考えられる。さらに、いずれの研究とも、集団内での相互作用がスキルの獲得や維持に良い影響を与えている可能性を指摘している。これらの研究から、個人を対象としても、集団を対象としてもSSTを実施することは社会的スキルを学習するために有益であること、子どもが自分の状態を言語で表現する術を持つと問題行動が減少する可能性が高まることが示された。

ところで、個人を対象とする場合は標的スキルの選定は容易であろうと考えられるが、集団を対象とする場合にはどのような点に留意する必要があるのだろうか。設定する標的スキルの内容について、藤枝<sup>7)</sup>は保育者と小中学校の担任・副担任を対象としてアンケート調査を実施している。この調査から「相手の気持ちを考えて接する」「上手に相手の話を聞く」「自分の意見や考えをはっきり伝える」の3つのスキルはどの発達段階の子どもにも学習させる必要があると保育者や担任・副担任が認識していることが指摘された。さらに、こうしたソーシャルスキルトレーニングを教育的に実施することが必要な時期として、保育者は小学校3、4年生から高校まで、小中学校の教師は小学校の6年間と考えてい

ることが示された。上述の3つのスキルはその内容を鑑みるとやはり外在的問題行動を未然に防ぐことにポイントがあるように思われる。

ここで、幼児を対象としてSSTを実施する場面設定を整理しよう。対象児が対人行動や集団行動において適切なふるまいをするスキルを持っていない、あるいはうまく活用できない状況があるならば、SSTを実施することに異論はないだろう。また、引っ込み思案な行動をする場面が多いなど子ども本人が活動に参加して発達的に重要な経験を得る機会を逃すような不利益な状況が継続する場合も、社会的スキルを学習することで改善する可能性があるため、SSTが効果的に作用すると考えられる。外在的問題行動に直接アプローチする必要がある場合には個別のSSTとなるであろうが、就学前も就学後も子どもたちは多くの時間を集団行動で過ごすこと、集団の中で失敗経験を継続させないことがその後の適応状況を左右すること、集団での相互作用が期待できることを考慮すると、保育場面ですべての子どもを対象として社会的スキルの学習場面を設定することが望ましいのではないかと考える。

## 5. おわりに

本稿では、すべての子どもを対象として社会的スキルの学習場面を設定することを提案したが、多くの保育現場ではその学習場面を設定し、訓練を実施し、その効果を検証することが容易にできる環境ではないことが推測される。今後の課題として、保育現場でスキルの適用が容易にできるような教材のパッケージ化が必要であり、現場の保育者の協力を得ながら教材の検討をすすめていきたい。

## 引用文献

- 1) 渡辺弥生, “社会性”, 心理学辞典, 有斐閣, p.365. (1999)
- 2) 高橋高人, 松原耕平, 佐藤正二, 幼児に対する集団社会的スキル訓練の効果—標準群との比較—, 認知行動療法研究, 44(1), p.41-51. (2018)
- 3) 岡村寿代, 杉山雅彦, 引っ込み思案幼児への社会的スキル訓練: 相互作用の促進と問題行動の改善(実践研究), 行動療法研究, 33(1), p.75-87. (2007)
- 4) 半田健, 平嶋みちる, 野呂文行, 自閉症スペクトラム障害のある幼児に対する機能的アセスメントに基づいたソーシャルスキルトレーニングの効果, 障害科学研究, 38, p.175-184. (2014)
- 5) 岡村寿代, 金山元春, 佐藤正二, 佐藤容子, 幼児の集団社会的スキル訓練・訓練前の特徴に焦点をあてた効果の検討(実践研究), 行動療法研究, 35(3), p.233-243. (2009)
- 6) Achenbach, T. & Edelbrock, C., The classification of child psychopathology: A review and analysis of empirical efforts, Psychological Bulletin, 85, p.1275-1301. (1978)
- 7) 藤枝静暁, ソーシャルスキル教育における発達段階ごとの目標スキルの選択と実施時期に関する研究, カウンセリング研究, 47(4), p.221-231. (2014)